企画展『まるっと縄文100％』での試み

「ＪＯＭＯＮワンダーランド」と「縄文土器の逸品」より

三浦　武司

１　はじめに

2018年は、東京国立博物館において開催された「縄文―１万年の美の鼓動」展をはじめとして、全国的に縄文時代をテーマとした特別展が数多く企画された年であった。近年の、北海道・北東北の縄文遺跡群の世界文化遺産登録を目指す盛り上がりがあったり、科学技術の活用による縄文時代の新発見が続いてきたことにも起因するのだろう。とにかく、日本中で『縄文時代』がムーブメントとして、盛り上がった年であった。

本館においても年４回開催している企画展のうち、本年度は春と夏の２回の展示を縄文時代をテーマとして開催することとした。『ＪＯＭＯＮワンダーランド』と『縄文土器の逸品』の両展である。筆者はこれらの展示を担当するにあたって、全く対称的な展示として企画しつつも、２つの展示を貫く「まるっと縄文100％」という共通のキーワードを設けた。この言葉には、２つの展示を併せて見学することで「まるごと」福島県の縄文時代を「100％」満喫できる企画展示にしたいとの意図を込めたものである。

小論は、『ＪＯＭＯＮワンダーランド』と『縄文土器の逸品』展の概要、展示のコンセプトや展示法の工夫、展示の結果及び反省点について、両展の展示担当者としての経験を紹介するものである。

２　「ＪＯＭＯＮワンダーランド」

（１）展示期間

４月21日（土）～６月17日（日）の期間で、開会日数は計51日間。

（２）見学者数

見学者の総数は6,472名。うち、中学生以下の見学者数は、3,187名を数える。見学者の約半数が児童・生徒であった。展示期間が学校団体の見学時期に重なったことに起因する。

（３）対象年齢

展示の主な対象年齢は、歴史学習を学びはじめた小学校６年生とした。

写真１　「ＪＯＭＯＮワンダーランド」展を見学に訪れた児童

（４）展示の理念

本館収蔵の縄文時代資料を児童に分かりやすく紹介することを展示の目的とした。縄文時代の特徴的な出土品や、教科書に記載されている種類の資料を展示することにより、小学校社会科の歴史学習に役立てる内容とした。児童が、縄文時代の暮らしや様々な道具の役割を通して、当時の生活まで感じ取れるような展示を目指した。

もちろん、ワンダーランドという展示名に負けず、縄文時代をワクワクしながら理解できる展示を心掛けたことは言うまでもない。

（５）展示構成

５つのコーナーで構成した。「なぜ」や「だぁれ」など、見学者に問いかけるようなオープンクエスチョンのコーナータイトルを冠した。タイトルで児童の興味を引き、その内容を解説していくという展示構成とした。

①なぜ、このかたちともようなの？

主に縄文土器を中心に紹介した。７月から開催する「縄文土器の逸品」では、縄文土器のみを展示する予定であったため、本展では土器の展示を限定的に行った。本コーナーは、６つの小テーマに区分し、土器の用途や技法などを簡潔にまとめた(写真２)。さらに、造形美あふれる土器やシンプルな文様の土器、大型土器やミニチュア土器などを展示することで、「縄文土器」と一口に言っても、多様な土器が使われていたことを紹介した。また、顔に見えるような土器の文様を集成するなど、児童が興味を持てるような土器の見方を提示した。

写真２　法正尻遺跡出土土器と現代の鍋

②縄文人は石マニア？

本コーナーでは、主に石器から読み取れる縄文人の石材選択力や、石材から推定できる地域間交流の紹介を行った。展示にあたっては、「狩りの道具」、「食の道具」、「祈りの道具」というように、石器を用途ごとにまとめて配列した。これは、用途を想起させる考古学用語と実際の用法との不一致から、誤解を招くことを避けたいとの狙いによるものであった(写真３)。また、石器によって製作される遠隔地との交流の道具の一例として、新地町双子遺跡出土丸木舟を展示した。

写真３　石器の展示法とキャプション

③ドグウはだぁれ？

縄文時代の特徴的な遺物の1つである土偶を、時期ごとの分類・展示ではなく、顔の表情やヘアースタイル、アクセサリーの有無などのまとまりで展示した。縄文人のファッションや習俗を、児童が興味を持って読み取れるように配慮した展示法とした(写真４)。

写真４　土偶の展示法とキャプション

④じょうもん動物園

動物装飾が付いた土器や動物型土製品、キノコ型土製品を展示することで、豊かな自然の恵みを土器や土製品に投影した縄文人の心情をイメージできる展示とした。動物意匠の土器や土製品は、児童にも親しみやすいと考えた。展示ケース内を人工芝で覆い、土製品を用いて「動物の森」や「キノコの山」を再現する遊び心満載のコーナーとした(写真５)。

写真５　じょうもん動物園の展示

⑤歴史はかわる？

本コーナーは、筆者や児童の親世代が学校教育で習ってきたこれまでの縄文時代観と、現在の研究の進歩や科学技術の発展により分かってきた新しい縄文時代観を、比較しながら紹介するパネル展示とした。

「ＪＯＭＯＮチェンジ」と名付け、縄文人の暮らし・縄文人の食生活・縄文人の身分・縄文土器の年代の４つのテーマを主題に取り上げた(写真６)。

教科書に書かれていることも、研究の進展により、新しく書き換えられることがあること、それが歴史の醍醐味でもあり面白味でもあることに、子どもたちが気付ける展示を目指した。また、大人にも知識のブラッシュアップを兼ねた展示となるよう心掛けた。

写真６　歴史はかわる？の展示パネル

（６）展示の工夫

〈目立つテーマカラー〉

コーナーごとにテーマカラーを設定し、まとまりを表現した。特に明るく目立つビタミンカラーをコーナーごとに用いて、色彩豊かなパネルやキャプションを多く使用した。縄文時代の展示では、どうしても粘土で作られた資料の展示が中心となってしまい、茶褐色の単調な色で占められることが多くなる。これをカラフルな展示パネルで補い、明るく親しみやすい印象を

与えることとした。（写真１～７）

〈マンガを用いた解説パネル〉

解説展示パネルは、職員が作成した展示のキャラクターと子どもとの会話を通して、縄文時代についての解説をするという手法を採用した。児童が親しめるマンガを用いることで、展示解説を「セリフ」として読める工夫をした（写真７　ａ）。さらに写真や模式図を多用することで、目で見て理解できる展示パネルも多く作成した（写真７　ｂ）。

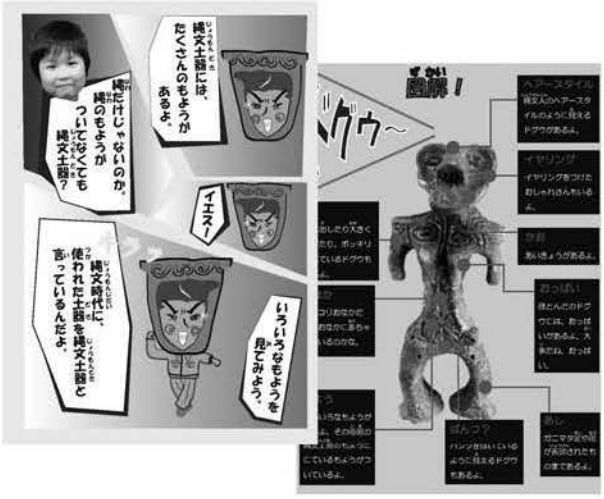

写真７－ａ　マンガ風展示パネル（左）
写真７－ｂ　展示パネルの例と「図解！ドグウ～」パネル（右）

〈伝わりやすい語句・用語〉

展示パネルとキャプションに記載したすべての漢字には、ふりがなを付記した。さらに極力、専門用語を排除した。例えば土偶の解説やキャプションでは「おっぱい」や「ぽっこりおなか」などと記述して、簡潔で子供にも分かりやすい語句を選択した。

〈ハンズオン展示〉

展示室の一角に、見学者が触れて体験できるミニコーナーを設置した。黒曜石や頁岩などの石器石材に触れることのできる体験、職員が製作した土笛を手にとって音を出すことのできる体験、土偶の重さと同じ重量の砂袋を用意して重さを感じ取れる体験などを行えるようにした（写真８）。本物の黒曜石に触れたり、土偶の重量を体感したりすることは、児童にとっても新鮮で、興味深い体験であったようである。

また、野外の体験広場の一角では、石斧で丸木舟の製作体験ができる「いつでも特別体験」を始めた。これは、「実際に石斧で木は切れるのか？」、「本当に舟は作れるのか？」という疑問に、見学者が体験を通して答えを感じてもらう企画である。展示した新地町双子遺跡出土の丸木舟を見学した親子が、実際にこれを体験している様子が見受けられた。展示と古代体験、製作実験を関連づけて実施した例である。2019年３月末においても、丸木舟の製作は途中である。この丸木舟づくりの詳細については、本書所収の「丸木舟を刳る　その１　」に詳しい。

写真８　ハンズオン展示の様子

3　「縄文土器の逸品」

（1）展示期間

7月7日(土) ～9月2日(日)の期間で、開会日数は55日間である。

写真９　「縄文土器の逸品」展の全景

（2）見学者数

見学者の総数は5,498名。内、中学生以下の見学者数は、2,170名である。見学者の約４割が、児童・生徒であった。

（3）対象年齢

主な対象を中学生以上に設定した。

（4）展示の理念

本館に収蔵している多くの資料の中でも、縄文土器の際立つ優品を展示することで、縄文土器のもつ巧みさ・力強さ・美しさが感じ取れる展示を目的とした。

見学者が、林立する土器の世界に自然と入り込んで、縄文土器の形・文様・技法・彩色などをじっくりと観察できる、美術館のような雰囲気づくりを心掛けた。

（5）展示構成

土器を概ね型式編年順に展示することを軸としてコーナーを構成した。各コーナーには、展示している土器群を鑑賞する一助となるキーワードを配した。縄文時代草創期から中期中葉の土器の展示、縄文時代中期後葉から後期の土器を中心とした展示、晩期の土器群の展示と２つのミニテーマ展の３つのコーナーを設けて構成した。

①土器のデザイン力

道具としての役割はもちろん、シンプルでありながらも機能美も満たしている土器、一方、実用性とは相反するような過剰とも言えるデザインの土器を型式変遷を追うように展示した。縄文人のイマジネーション溢れる独創的な造形を堪能してもらうことが目的である。

写真 10　土器のデザイン力の展示

縄文土器が全国的に普遍的に作られるようになり、主に煮炊きする土器としての役割を担った確立期としての縄文時代早期の土器、器種が分化し、縄文土器の種々の要素が発展した縄文時代前期の土器、土器の地域色が明確化し、最

も立体的で大型の土器が製作され、各地域の独自性が発揮された縄文時代中期の土器など、それぞれの時期の優品を展示した(写真10)。国指定重要文化財の磐梯町・猪苗代町法正尻遺跡出土土器も展示した。

②ふくしまのイッピンを感じる

本館に収蔵されている縄文時代資料として最も充実している中期末～後期前葉の大型土器を中心に展示し、さらには注口土器や赤彩土器を出来る限り多く展示した(写真11)。大型の縄文土器は、スケール感や迫力を見学者に感じていただくため、安全対策を講じた上でできる限り露出展示にこだわった(写真12)。

写真11　展示室内の様子

写真12　大型土器の露出展示

③縄文人のエスプリ

磨り消し技法を多用した洗練された土器が盛行した縄文時代後期と晩期の土器を中心に展示した。これまであまり展示する機会のなかった、浪江町田子平遺跡出土土器や表裏赤彩された下谷ヶ地平Ｃ遺跡出土土器、大洞緒型式の浅鉢などを展示した。

併せて、食物容器以外の用途と考えられる珍しい器形の土器を多数展示した「縄文土器の珍品」、他地域の影響を受けた土器などについて紹介した「旅する縄文土器」の２つのミニコーナーも話題となった。

縄文人の土器製作技術の高さや芸術性、さらには土器を通して認識できる縄文時代の交流についても考えられる展示とした(写真13)。

写真13　「縄文土器の珍品」と「旅する縄文土器」のコーナー

写真14　コーナーパネルと文字パネル

（６）展示の工夫

〈落ち着いた配色〉

展示パネル及びコーナーキャプションは、

全体的に落ち着いた色彩とし、展示資料である縄文土器を際立たせることを意識した。コーナーパネルのみ、アイキャッチ的にポスターで使用した幾何学デザインを色味を抑えて使用し、展示室に重厚感を持たせた。（写真14）

〈最低限の解説パネル〉

土器の展示数が多いため、１点ごとの土器の解説文やキャプション内での説明は、猥雑な印象となり読みにくいと判断し、設置しなかった。その代わりに、まほろん職員が推薦する展示資料を「私のおススメする逸品」とし、学芸員個々の解説を付した。発掘当時のエピソードなどを交えて解説したこの試みは、土器の展示のみではわからない、出土当時や整理作業時の苦労や喜び、展示品の見方や考え方などを伝えるもので、来場者アンケートにおいても非常に好評であった。（写真15）

写真15　「私のオススメする逸品」解説パネル

〈照明の工夫〉

展示室内のシーリングライトの照度を暗くし、スポットライトとケース内照明、さらには、本展示のために新たに購入したＬＥＤライトで土器を浮かび上がらせるように照明を工夫した。例えば胴部が張る土器の下半にも照明を当てることで、上からの照明では暗くなってしまう部位まで鑑賞できるよう配慮した。

〈雰囲気づくり〉

解説パネルの文字数を極力減らすことで、文様や技法に注目してもらうような工夫をした。さらに、製作した縄文人の暮らしにまで思いを馳せて見学できるよう、じっくりと土器を鑑賞できる美術館的な雰囲気を作り出す配慮をした。

4　おわりに

（1）学芸員からのアプローチ

今回の２つの展示では、筆者は展示室内で多くの見学者と会話することを心掛けた。見学者との積極的な対話は、学芸員も展示構成要素の一つと捉えたからに他ならない。

専門的な用語や解説を避けた『ＪＯＭＯＮワンダーランド』展では、物足りなさを感じる大人の方に向けて、より詳しい縄文時代の説明を行った。一方、土器のみを展示した『縄文土器の逸品』展では、土器を通じて製作・使用した縄文人や、その土器の背景となる生活や社会を想像できるきっかけを学芸員との語らいの中で提供できればと考えた。

この取り組みは、見学者の興味関心を引き出すような会話をすることにより、私自身が見学者と展示資料との介在者となり、縄文時代の魅力をさらに深く伝えようと試みたものである。見学者の年齢・性別・興味・関心事によって展示資料の見方や感じ方は異なるものであろう。もちろん、見学者に合わせた表現や伝え方を工夫しつつ、学芸員が自分の言葉で表現すること

が重要であると考えている。展示を通して、見学者を導くマネジメントも学芸員の1つの役割だと思っている。

この２つの展示では、解説文やキャプションに記載したことは、あくまでその展示資料の一つの側面を解説したに過ぎないと考えた。児童にも「分かりやすい」ことを主眼とした『ＪＯＭＯＮワンダーランド』では、伝わりやすい語句を選択した。「分かりやすい」ことは良いことであるが、分かりやすいことと、短絡的であったり安直なことは全く別モノである。明快な展示パネルやキャプションによる解説を意図したつもりではあるが、さらにしっかりと理解してもらえる工夫や努力の一つとして、見学者に対話で伝えることを試みたわけである。

（２）来場者アンケートの結果から

縄文時代をテーマとした対称的な２つの企画展は、それぞれに展示のコンセプトを明確化し、展示法などに工夫を凝らした。これらの展示を見学者がどのように感じたのか、縄文時代を「まるごと100%」満喫できたのか、来場者アンケート結果の一部を紹介する。

『ＪＯＭＯＮワンダーランド』展では、「今、授業でやっている縄文時代が分かった。」という児童の答えは、筆者にとって喜ばしい意見であった。大人からの意見も多く頂戴した。「子どもや初心者などにも分かり易く工夫されている。」、「展示物へのコメントが親しみを持てた。」、「私の世代だと新旧比較パネル（５　歴史はかわる？）は知識のブラッシュアップになった。」などの好意的な意見が多く寄せられた。児童向けに企画した展示であったが、大人も満足できる内容の展示であったようである。

『縄文土器の逸品』展では、「思っていた以上に内容・量とも多かった。」、「県内の土器ってこんなにあるのかと思った。」、「見ごたえのある逸品の集まりでした。」、「『私のおススメの逸品』が学芸員さんの熱を感じて良かった。」などの意見をいただいた。また、「東博の縄文展も見てきたが、県内にも素晴らしい土器があることを知った。」ともあり、東博の展示とあわせて、本展も見学いただいた方が多いようであった。一方、「図録が欲しかった。」との要望は複数いただいた。確かに展示が出来上がってみると、展示資料は逸品ぞろいであり、図録を作れなかったのは私自身心残りであった。

（３）さいごに

パブリック考古学と呼ばれる、文化財や考古学をいかに社会に還元するかについての研究も盛んになっている。まほろんでは、様々なアイデアを出し合い、あらゆる機会を通して文化財を守る意識の醸成や人材を育てていく取り組みを日々行っている。

本文は、企画展で実践した試みの一端を報告したものである。今後も展示や体験活動支援などを通して、過去から未来へ文化財をつなぐ取り組みを続けていきたい。